

【視聴草】 絵図細目

氏家 幹人

国立公文書館内閣文庫には、他に所蔵のない（あるいは伝存が極めて稀な）資料が多数含まれている。その多くは活字翻刻または影印版の出版によって研究者等の利用に供されているが、それぞれの資料に掲載されている様々な図や挿絵については、検索目録が十分に整備されているとはいえない。絵図が、文字だけでは表現できない歴史事実を記録した貴重な資料であることは周知に属するが、一方で書物の中に貼付され模写された図を短時間で見つけ出し、その資料的意味を理解することは容易ではない。

本稿はこのような「書物の中に閉じ込められた絵図」の存在をより多くの人々に紹介し、あわせて絵図資料の検索を容易にするための試みである。最初に取り上げた資料は『視聴草』（請求番号 二二七―三四）。内閣文庫の資料の中でも、内容の多彩さと絵図の豊富さにおいて第一級の近世資料である。

『視聴草』の編者宮崎成身は、江戸末期の旗本（禄五百石）。通称は太一郎のちに次郎大夫。字は信卿。百拙斎、栗軒と号し、屋敷が牛込神楽坂下の牛込門に近かったことから牛門老人とも号した。天保二年（一八四二）八月に家督を継いだ成身は、弘化四年（一八四七）一二月に西丸小性組から小十人頭に転じ、安政四年（一八五七）七月に持弓頭を拝命。翌年九月二二日に老衰と病身を理由に致仕。成身はこの間、『朝野旧聞竝覽』『大狩盛典』『通航一覽』『通航一覽続輯』など幕府の編纂事業に加わり、調査研究に従事した（これらの編纂物もまた内閣文庫に含まれ国立公文書

館が所蔵している）。成身はまた公務の間に『教令類纂』『憲法類集』など幕府法令集を編集し、『六芸名義解』等も著している。緻密な調査研究と精力的な執筆で後半生を過ごした人といえよう。残念ながらその前半生については、生没年共に定かでない。

『視聴草』は、成身が文政一三年（一八三〇）頃から三〇年以上にわたって手元にある資料や記録を自他の著述等と共に編纂した雑録である。『視聴草』の稿本は、元は一七八冊だったが、のち四冊（初集之三・続初集之一・続四集之六・続七集之八）を欠き、一方、正統両集の総目録各一冊が増補された結果、計一七六冊が現存する（請求番号二二七―三四）。内閣文庫には、昌平坂学問所旧蔵『視聴草』九九冊（請求番号二二七―三五）も架蔵されている。他に神宮文庫（三重県伊勢市）と国立国会図書館が、それぞれ一七六冊、一一五冊を所蔵しているが、いずれも内閣文庫所蔵稿本（請求番号二二七―三四）に基づく写本であるという（福井保『『視聴草』解題』『内閣文庫所蔵史籍叢刊特刊第二 視聴草』第一巻・所収）。

『視聴草』稿本が内閣文庫の蔵本になる経緯は、福井保氏が「この稿本は明治五年ごろに教部省の所蔵となり、同十年に同省が廃止されたとき内務省に移され、同十七年に太政官文庫（内閣文庫の旧称）が創設されたとき、内務省から移管を受けて現在に至った」（『『視聴草』解題』）と記している。その後、昭和四六年（一九七二）に国立公文書館が創立し内閣文

庫が同館の所蔵資料の一部になったのに伴い、国立公文書館の所蔵資料となった。

【凡例】

○絵図資料番号は、「初集之一」（第二冊目）から「続八集之八」（第七六冊目）までの通し番号とした。

○資料の件名は原則的に「視聴草総目録」（第一冊目）、「続視聴草目録」（第一〇一冊目）の記述に従い、必要に応じて文章を補い、あるいは新たに件名を追加した。

○収録されている絵図が印刷物（木版）である場合は【刊】、彩色を施されている場合は【彩色】、色刷りは【刊・色刷り】と付記した。また絵図の一部に朱が使用されている場合は【一部朱】、部分的に彩色が施されている場合は【一部彩色】とした。

「初集之一」

「初集之二」

一 踏絵

キリシタン改めの踏み絵の図

以下の説明あり。「赤銅鑄物、絵は一向不相分、恰好図のこ
とく長崎奉行より借受、支配所村々人別帳ニ引合不残為踏申
候、私領ニては一日銀五匁ニて借受候由ニて御座候、絵踏相
濟候へハ村々いわいたし候事ニ御座候」
昔ある人から贈られたる絵図であるという。

二 象（首縄・足留・象よひ候笛・鳶口鉄・櫛鉄輪・象あらひ・苧縄・

象耳にかけ候かぎ銅等の図）

享保十四年（一七二九）に舶来した象について長崎の通詞より差し出した書付の後にあり。

三 駱駝 一名カメエル

アメリカ船（船主ステワルト）に積まれて渡来したラクダの図。

「右ノ獸ハ紅毛国ニテ百姓家ニ飼置田畑ノ用ニツカフ、或ハ
官人遠見ノ車ヲヒイテ足ハ三ツニヲレリ、道ヲ行事一日二百
里ヲ走ル、荷ヲ積時初膝ヲ折、重サ千斤ニ及ヒ足ヲ立ツ、食
スル時一度ニ大食シ、四五日ハ物ヲ食セス、ヤサシキケモノ
ナリ、享和三年癸亥七月来リケレトモ、□ンハヤア手印無キ
ニ依テ彼国へ積返シ、文政四巳ノ年江戸ニ来ル」

「初集之三」

（稿本になし。昌平坂学問所旧蔵の別本へ九九冊本 請求番号
二一七―三五より）

四 人面瘡

文政二年（一八一九）、仙台の商人が脛に出来た人面瘡（人
の顔をした腫れ物）の治療のため、江戸の医師桂川国寧のも
とを訪れた。その人面瘡の図。

五 細川屋敷内え落たる異獣図（二種）

文政六年（一八二三）八月一七日の大風の際に、江戸の空中
を飛行していたという「異物」のうち。

〔初集之四〕

六 素河侯画賛狂歌【一部彩色】

白河侯（松平定信か）の画賛と狂歌。自在鍵と鍋の図。

「この尻日々三度つゝ焚時は天下平なり、焚さる時は民くるしむ、高樓の御製も此尻より出る、またみたりに焚時は家を失ふ、焚さる時は交鮮し」

「よきによあしきにはななへて世の人のこゝろハ自在鍵なり 白川主人」

七 冷暖面

上下をひっくり返すことで怒っているようにも笑っているようにも見える顔の絵。

「人面逐高低 開口如咲世ノ世情看冷暖 閉口似怒人」「此面下ヨリ見レハ喜ブコトク反シテ上ヨリ見レハ怒ルガコトシ」

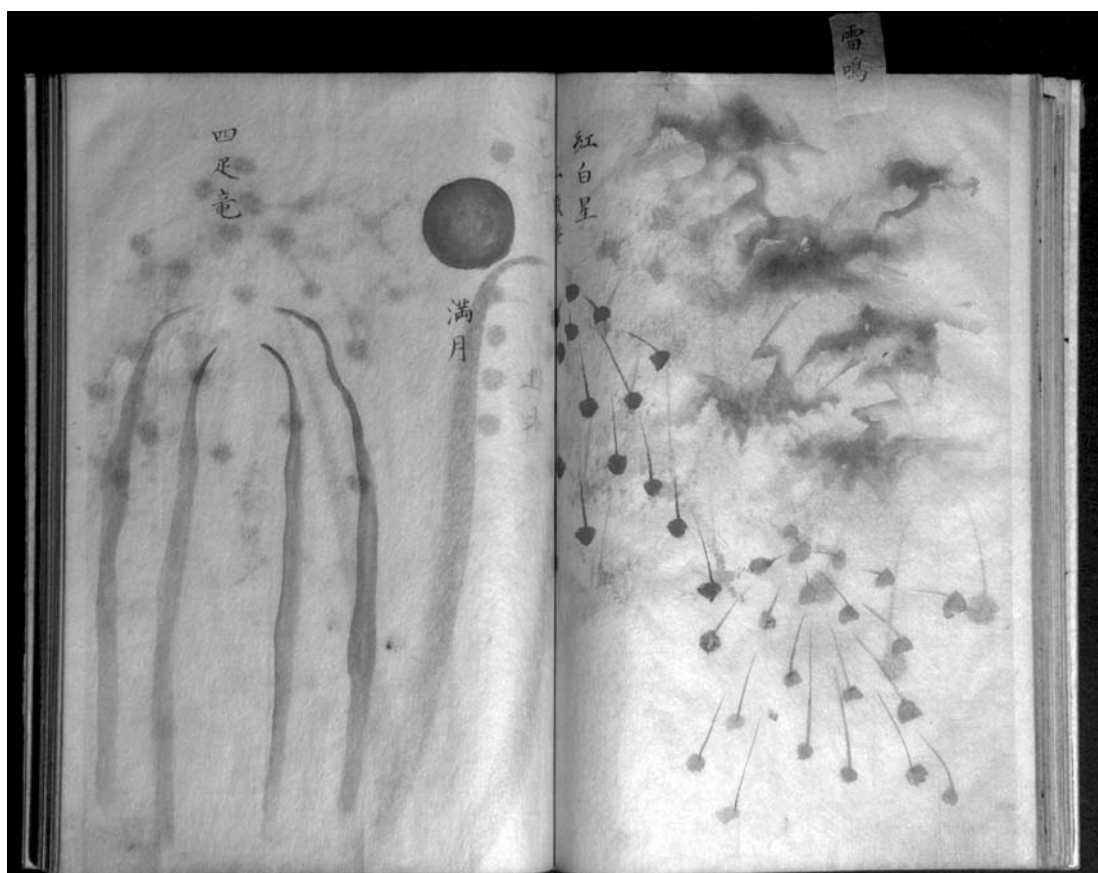
〔初集之五〕

八 崎人狼烟【彩色】

文政一三年（一八三〇）八月三日、佃島海上で、長崎御鉄砲方の高木内蔵助が行った狼煙合図の図（昼の合図二七番、夜の合図一八番）

九 気砲記（気砲全備之図・銅金金具ノ図・金具取ハツシノ図・蓄気筒・生氣筒ノ図・生氣棍ノ図・生氣之法）【一部彩色 刊】

『気砲記』は国友藤兵衛能当の著。文政二年（一八一九）の序を持つ刊本で、気砲は俗に風砲ともいい（蘭名はウインド



（八 崎人狼烟）

ルウル)、空気銃のこと。

〔初集之六〕

一〇 営中管弦并記文歌詠【一部朱】

文政六年（一八二三）三月二日に江戸城大広間で催された管弦の会の詳細を記した記録。当日の間取り、座席図。

一一 肥後巨人（肥後国の大男牛俣武右衛門の手形・足形）

文政一〇年（一八二七）四月、細川公御隠居の供に従って江戸に來た牛俣武右衛門（身長七尺五寸 二三歳）の大きな手足。足の大きさは「四文銭拾式文半並」。現在は栄翁殿（島津重豪か）の屋敷にいたとも記されている。

一二 メンコル人手形

文政子年（文政一一年（一八二八）六月二日に肥前生島に漂着した「モンコルト」国の捕鯨船の中にいた「メンコル国」人の手形。同人は身長八寸。「アセヒミルノ手形也」とあり。

〔初集之七〕

一三 御覧相撲【一部朱】

- ・寛政三年（二七九二）六月二日、江戸城吹上で相撲上覧の際の、土俵・花道等の図。
- ・文政六年（一八二三）四月三日、相撲上覧の際の土俵・棧敷等の図。
- ・文政一三年（一八三〇）三月二三日、吹上一三間御門外芝

間において相撲上覧の際の「土俵絵図面」および棧敷配置図。

一四 寛政風憲肖像【彩色】

寛政一〇年（二七九八）当時在職していた大目付（池田筑後守・松浦越前守）、目付（新見長門守・佐久間左京・渡邊久藏・蜂屋源八郎・羽太荘左衛門・大草大次郎・横田十郎兵衛・松平田宮）の肖像。

（一四 寛政風憲肖像）



一五 六芸名義

『六芸名義』は村士玉水著。六芸は中国で士以上が修得すべきとされた礼・楽・射・御・書・数の六種の技艺で、このうち「数」の測量法の図などが掲載されている。

〔初集之八〕

一六 松前牧士【彩色】

文政六年（一八二三）四月末に筋違橋付近で目撃された、松前藩士（「松前の侍何かし」）の馬の曲乗りの図。

一七 懸想文（懸想文売）【彩色】

「懸想文」は、江戸時代の京都で正月に売られたお札。お札には恋文に似せた文が書かれ、商売繁盛や良縁を叶えると考えられた。このお札を売り歩く「懸想文売」の図。文政七年（一八二四）のもの。

一八 娥眉橋柱

文政一〇年（一八二七）四月一日、越後国椎谷の海中で発見された娥眉山（中国四川省の名山娥眉山か）の橋柱の図。橋柱には「娥眉山下橋」の五字が彫られていた。このことが領主（堀近江守）に報告され、さらに八月に老中松平和泉守に届けられたという。

一九 樹身仏現

下総国葛飾郡山崎村の海福寺境内で伐採された木の中から観

世音の銅像が出現（文政二年（一八二九）五月三日の書付）。江戸谷中の多宝院の境内でも、子（文政十一年か）十一月に伐採された木の小口に、弥陀の像に似た模様が。図は後者のものか。

二〇 巨菜

下総国相馬郡押付新田の百姓長左衛門の畑に生えた巨大な菜種（丈六尺余）の図。

〔初集之九〕

二一 赤坂酒店異事

文政四年（一八二二）十二月、赤坂一ツ木町の酒屋の半切（半切は盥の形をした底の浅い桶）が突然紛失した。翌年正月に半切は何者かの手で戻されたが、半切には鞍馬山の大餅つきのために諸国の清浄な盤（半切）を借用した旨の手紙が添えられていた。図は鞍馬山から酒屋にあてた手紙の包紙など。

二二 己丑大火記

文政一二年（一八二九）三月の江戸大火（佐久間町火事）の後に、町奉行所が町火消に配った消火道具（鋸ほか）の図。

〔初集之十〕

二三 一橋老公准槐

文政八年（一八二五）、一橋治済に准大臣宣下の際に、宣旨

を入れた「覧箱」、覧箱を入れた「唐櫃」、および唐櫃を納める「篋」の図。

二四 品浦斃鯨

寛政一〇年（一七九八）五月、品川の漁師たちに捕獲された鯨の図。

「二集之二」

二五 佐渡異亀

文政一〇年（一八二七）四月一三日に佐渡で捕獲された大亀の図。三つの頭を持つ全長一丈二尺八寸の「不思議の霊亀」で、甲に文字が彫られ、一日に一升余りの酒を平らげた。

二六 武州足立郡蒲桜

現在の埼玉県北本市石戸宿の東光寺境内にある「石戸蒲ザクラ」（国指定天然記念物）の由来と、蒲桜および石碑の図。

「二集之三」

二七 新田氏軍扇

魚沼郡小千谷組小千谷村儀左衛門所蔵の新田義貞鉄軍扇の図。

二八 慈悲心鳥【彩色】

日光山中に棲息する慈悲心鳥の図。

「日光山中二慈悲心鳥といふあり、其声を以て称呼として別に名あるを聞かず、此鳥山中の深林邃谷の中に栖て人烟近き

処に出る事なし（下略）」

二九 柳河斃蛇【彩色】

文政六年（一八二三）七月一四日、筑後国柳河で、大きな蛇が降り注いだのち、蛇に埋もれて死体になって発見された怪蛇の図。全長四尺五分で頭部に八寸ほどの毛が生えていた。

三〇 かじか

カジカカエル〈河鹿蛙〉と魚のカジカ〈鰻〉の図。

「二集之三」

三一 八朔献駒の記

文政六年（一八二三）の八朔御馬献上の儀（幕府から朝廷に馬を献上する儀）の様子を描いた図。

三二 馬城八景

『馬城八景』は、伊（藤）篤敬なる人物が住居近辺の八つの佳景を描き、知人たちに詩歌を乞い、書き添えたもの。文政二年（一八二九）跋。八景は「高田晚霞」「蕉庵春花」「堰口瀑布」「赤城秋月」「桂田落雁」「杜山古松」「疇里夜雨」「馬台幽鐘」。

「二集之四」

三三 万曆帝勅書

中国の明の皇帝万曆帝（在位 一五七二—一六二〇）の勅書

の図。

「此巻土ノ付タルヲムサト洗濯シタルモノトミユ、文字ユカ
ミ写シカタシ、可惜」

三四 口琴

口琴は、口に銜えて奏する楽器で、「びわぼん」「つがるぶえ」
とも。津軽、越後、薩摩の三種の口琴の図。

三五 福山志料奇品【彩色】

『福山志料』は、菅茶山らが編纂した福山藩の地誌で、文化
六年（一八〇九）成立。同書に掲載されている「狸々の手」
「魚鱗」「異魚」の図。

三六 訓点私言

三好清著『訓点私言』（文政七年へ一八二四）成立）に引か
れている平古止点（おことてん）の図。平古止点は、漢文を
訓読するために用いられた仮名がわりの符号。

【二集之五】

三七 武田家陣立

「八王子千人頭嘉村又左衛門」所蔵の「甲州信玄陣立」の写。

三八 晃山登拜五幸記・附詩草強飯【彩色】

日光山輪王寺強飯の図

【二集之六】

三九 異国船漂着（諺危利亜船相州浦賀浜渡来始末書写）

文政元年（一八一八）五月、浦賀にイギリスの商船来航。同
船を会津藩の兵船等が囲んでいる図。イギリス船の図。イギ
リス人の図ほか。

四〇 沈門何氏書啓

長崎で遊女の色に迷った中国人に、心配した妻が書いた書啓
（手紙）。手紙の包紙の図。

四一 房州奇松

安房国長狭郡横須賀村（横渚村 現在の千葉県鴨川市のうち
の熊野三社権現社脇の松の太木が社殿の屋根の修復を邪魔し
ていた。文政四年（一八二二）三月二〇日、同木伐採の
旨を権現に奏したところ、翌朝、松の木は中程から曲がつて
修復の障りにならなくなったという。社殿と松の太木の図。

四二 覚真寺古碑誌

芝二本榎の覚真寺から明和八年（一七七二）に出土した誌銘
と「芝田氏万女之墓」と記された蓋の図。「万女」は芝田半
之助信重の女子で万治二年（一六五九）に二四歳で没。

四三 田安御門御堀古碑版類

文政四年（一八二二）二月四日、五日の両日、田安門下の堀
浚いの際に出てきた古碑の図。

四四 八王子村雨物

文化一四年（二八一七）一月二三日の昼八ツ（午後二時頃）過ぎに「多摩郡小比企村」近辺の百姓家の庭に降った奇物の図。「大ききハ三分許有、凡そ壺斗許ふれり、押つぶせハニチャクとして油のことき気味有、色ハ内外共白く少し鼠色あり、但内の下の方ハ桃色也」

〔二集之七〕

四五 三上侯邸犬追物記

文政一二年（二八二九）十一月、遠藤但馬守（近江国三上藩主）の牛込の屋敷で催された犬追物の次第に見える馬場の図。

四六 幼女遺筆

文政五年（二八二三）一月二七日に疱瘡（天然痘）のため六歳で亡くなった露姫の遺筆。姫の没後、父親の池田（松平）冠山（因幡国若桜藩老公 松平定常）が遺筆（歌・発句・手紙）を模刻させたもの。模刻は親類や知人に配られたが、その一つが綴じこまれている。

〔二集之八〕

〔二集之九〕

四七 篠雪

永井信濃守直養（大和国新庄藩主）所持の名刀家宝「篠雪」の押形を、文政一三年（二八三〇）、阿部正信が同刀の由来等と共に書写したもの。「篠雪」は初め池田勝入の家来片桐

与三郎が所持。その後勝入の帯刀となるが、長久手の戦いの際に永井直勝がこれを奪った。

四八 草加駅異竹

武州草加宿在足立郡中曽根村の百姓忠蔵の屋敷地内に生えた不思議な竹の図。
忠蔵は相撲の「田舎年寄」の免許を持ち、錦山忠蔵の名で祭礼相撲を渡世として何不自由なく暮らしていた。

〔二集之十〕

四九 豆州田代村山湧出

文政一一年（二八二八）三月二八日、伊豆国田方郡田代村に新たに山が湧き出た図。
小堀織部（寄合）の知行所年川村の山が陥没し、川をはさんで五〇間ほど離れた本多修理（火消役）知行所田代村に山が出来た。

〔三集之一〕

五〇 崎陽異獣【一部彩色】

文政一三年（二八三〇）三月二日、長崎港で鉄砲で撃ちとめられた異獣（アシカ）の図

〔三集之二〕

五一 寛政御鹿狩書留

寛政七年（一七九五）三月五日、将軍が下総国小金原（現在

の千葉県下にあつた幕府の放牧場)で、鹿狩(鹿は「しし」。
鹿・猪・兎・狸・などの獣のこと)を催した際の記録。

松戸宿利根川御船橋の図。御立場・御狩場・(御狩場御用)

高張提灯・各組羽織の図。

五二 白珊瑚

奇石数百種のコレクターの幕臣(先手組与力)土屋周輔が文
政一三年(一八三〇)秋に入手した白珊瑚の図。

五三 珊瑚考【彩色】

文政一三年(一八三〇)、浅尾種雄著。珊瑚の図あり。

『三集之三』

『三集之四』

『三集之五』

五四 伊勢参詣・附火災【一部朱】

文政一三年(一八三〇)閏三月一日、宇治今在家町より出
火。内宮宮中の立ち木に火が移り、古殿ほか焼失。この火災
に関する図。

五五 磨碑奇談

文政一三年(一八三〇)春ころから、何者かの手で古い石塔
が磨かれる「石塔磨」の怪が関東各地で流行、やがて流行は
江戸にも広がった。この怪現象についてはさまざまな風説が
流布したが、「墓洗い」という怪物の仕業ではないかとの説

も唱えられた。「墓洗い」の図二種(一つは「百鬼夜行の巻
物」から)。

『三集之六』

五六 鏡鞍

鏡鞍は鞍の一種。『鏡鞍余考』に「鏡草」と呼ばれる「蘿摩」
(蔓草の名)の図があり、左の説明が付記されている。
「切レハ白乳汁出ル、不祥ノ氣ヲ除キ邪氣ヲ払フノ神草ナリ」

五七 古金銭

・天明六年(一七八六)閏一〇月初旬、越後国五日市村百姓
五左衛門居屋敷内から掘り出された古金一五枚の図。
・寛政四年(一七九二)、九月二〇日、泉州土師新田の畑か
ら掘り出された和同開珎の図。

五八 異犬

文政一〇年(一八二七)、城州山科郷で出生した六本足の犬
の図。(当時は見世物にするために「宮川筋松原上ル町丸屋
九兵衛」方で飼育されていた)

『三集之七』

『三集之八』

五九 雲気人口談【一部朱】

文政一一年(一八二八)六月二七日、遠州城東郡河東村で、
異形の黒雲の中に赤い横雲があるのが目撃され、三〇日の夕

方から前代未聞の大風雨に襲われた。目撃された異形の雲の図。

六〇 異児六件

・文化四年（一八〇七）五月二十七日、伊予国松山で産まれた、耳が角のようで歯が生え腹に卍の字がある赤子の図。
・文政四年（一八二二）七月、江戸築地で、胎内一六ヶ月の後、大人のような頭髮と六本の歯をもって誕生した赤子の図。

・文政八年（一八二五）二月一五日、先手組同心の妻から産まれた、ナマコに似た「怪物」の図（出生地は江戸）。

・文化一四年（一八一七）四月一九日、尾張国名古屋伏見町で産まれた女子（左手に丁銀、右手に小判を固く握りしめて誕生）の図。

・遠州白羽村の大きな幼児（身の丈四尺五寸余、三度の食事は大人用の大椀で山盛り四杯）の手形の図。

・文政八年（一八二五）二月一七日、江戸の本所竪川に流れ着いた、頭が一つで身体が二つの小児の図。

『三集之九』

六一 異船漂着（ロシア使節レザーノフ長崎に来航）【彩色】

文化元年（一八〇四）九月、ロシア皇帝の親書をたずさえ、津大夫ら漂着民を同伴して、レザーノフが来航したが、通商を求めるロシア皇帝の親書は受理されなかった。
寛政五年（一七九三）に石巻港を出たのちロシアに漂着した

津大夫らが帰国までに辿った航路の図。ロシア国王の旗の図。使節レザーノフ、船長クルーゼンシュテルンの肖像。「手下之役人」の図。ロシア船の図。

『三集之十』

六二 庚寅京震

文政一三年（一八三〇）七月二日、京都の町を襲った大地震の記録。

（この地震で宝珠が落ちた）耳塚の図。七月二日から八月一日までの揺れの大きさを丸の大小で示した図。

『四集之一』

六三 浅間焼【彩色】

天明三年（一七八三）四月に噴火活動を開始した浅間山は、同年七月八日に大噴火（天明の浅間焼け）。

五月から七月まで、浅間山噴火の変化を描いた図。

六四 水虎【彩色】

寛永年中（一六二四―四四）に豊後国日田で捕獲されたカッパ（水虎）等の図一四点。

『四集之二』

六五 楠正成遺文・附胄

武州豊島郡戸塚村（現在の新宿区のうち）「宝泉寺」が所蔵する楠木正成の胄の図。

六六 霧島山鉾【彩色】

霧島の主峰である高千穂峰の山頂にあつた天の逆鉾の図。

六七 延享中御船改・附安宅丸（安宅丸の図）【彩色】

安宅丸は徳川家光が向井将監に命じて建造させた巨大な御座船。寛永十一年（一六三四）に完成。天和二年（一六八二）、維持費が掛かるのを嫌つて解体された。

六八 高山平馬

雑学者の山崎美成は、天狗にさらわれ修行した寅吉少年（高山白石平馬）の話を、文政三年（一八二〇）、『平児代答』と題する一書にまとめた。それを書写したもの。

・高山白石平馬肖像。
・天狗の羽団扇・下駄・木剣・書判の図。

〔四集之三〕

六九 二賢堂図

中山道上尾宿（現在の埼玉県上尾市）の山崎武平治が建てた学校「聚正義塾」の図。「聚正義塾」内に、朱子と菅原道真を祭るために設けられた「二賢堂」および「二賢堂神位」等の図。

七〇 鶴岡八幡宮神宝【彩色】

秦檜磨著。源実朝が右大将補任の際に仙洞から拝領した朱塗りの弓（鹿兒弓）と真羽矢の図。

七一 蘭婦【刊・彩色】

文政二年（一八二九）七月、オランダ船で長崎に来航した女性（画工の妻で名は「彌々」、一九歳）の図。

七二 世田谷日記

『世田谷日記』は、山崎美成著。文政九年（一八二六）成立。渋谷の金王八幡社境内にある文明二年（一四七〇）の古碑の図。

七三 春宵茶談

大草公明著。文政一〇年（一八二七）成立。三河国渥美郡山本某の家にある水口吉久作の煙管の図。水口吉久は天正年間（一五七三―一九二）の煙管工。

〔四集之四〕

七四 仏印（釈迦如来印文）

釈迦印璽の図。

七五 古鐙図

瀬名貞雄蔵本から大田南畝が写したものを借写した図。

七六 下河辺庄司行平の輪鐙

春田兵庫助忠次が下河辺庄司から譲り受けた二隻のうち一隻の図。

〔四集之五〕

七七 月字額の記

土佐国松山寺にある紀貫之筆と伝えられる「月字額」の図。

七八 山田仁左衛門（長政）事跡【彩色】

シャム（タイ）で日本人町の頭となった山田長政（？―一六三〇）が寛永三年（一六二六）に「浅間之社」に奉納した軍船の絵馬の図。

七九 銅製造図【彩色】

銅鉾石の採掘から棹銅の製造まで全一一図。

丹羽桃溪（一七六〇―一八二二）画。大田南畝旧蔵。『鼓銅図録』（請求番号 一八三二五四〇ほか）の挿絵と同じ。

〔四集之六〕

八〇 朝鮮人騎射歩射記

延享五年（一七四八）六月一〇日、東叡山下寺町で上演された、朝鮮人（通信使の一行のうち）による騎射・歩射の記。矢の図。弓場・棧敷の図。大田南畝旧蔵。

〔四集之七〕

八一 装束次第

・冠の図。

「十六歳未満ノ内透額ナリ、月ヲ如此置、上ヲハルナリ、月額ト不云シテ透額ト云」

〔四集之八〕

八二 狩場の霞【彩色】

文政六年（一八二三）四月二三日、江戸城西丸書院番所で、松平外記が起こした刃傷事件の顛末を挿絵を添えて記したものの。

〔四集之九〕

八三 弓削多某（弥右衛門）切腹

享和二年（一八〇二）正月、西丸書院番石河壱岐守組弓削多弥右衛門が、金の無心を断られ逆上して切り掛かってきた兄を殺害した罪で切腹を命じられた。切腹が行われた場の間取り、介錯・徒目付ほかの座席図。

〔四集之十〕

〔五集之一〕

八四 中将重衡盃

三位中将平重衡の盃の図。

八五 結銭木

神君（家康）が「金のなる木」と題し教訓のために記した図に、細川三斎が枝を書き添えたもの。

（幹は「よろづ程のよ木」「じひふか木」「しやうぢ木」。枝は「あさお木」「いさぎよ木」「しんばうつよ木」「ゆだんの

な木」「かせ木」「ついへのな木」「よふぜうよ木」「かないむ
つまじ木」

八六 鐘鼓之数・附禅院二十五点

初更一点から五更五点までの時の打ち方の図。

『五集之三』

八七 古管之筆簞

松波正供（大御番）の遺品の筆簞の図。後に伶人安部季良が
「竹鷲」と命名。

『五集之三』

八八 万民衣

万民衣（中国で謝恩の意を表するために、盛徳の官吏に人民
から贈る衣）の図。八代將軍徳川吉宗の下問に対して、元文
四年（一七三九）四月に「大通辞 林幸三郎」が長崎の中国
人に尋ねて答えた文書に添えられたもの。

八九 韓使服儀【彩色】

朝鮮信使一行（正使・副使以下、小童まで）の服装の図。文
化八年（一八一二）のものか。

九〇 草亭閑譚

『草亭閑譚』は、中国姑蘇（江蘇省）の沈璠の話を長崎の馬
元基が記録したもの。清朝期中国の風物に関するさまざまな

『五集之四』

九一 祖谷紀行

阿州美馬郡（現・徳島県）祖谷山の紀行。某家が所蔵する平
家の大旗・小旗の図。

九二 枇蘭樹（ひらんじゆ）図

寛政四年（一七九二）四月の図。

九三 異豚【彩色】

文化八年（一八一二）（本文に「文政辛未」とあるのは文化
辛未の誤り）に林述斎が朝鮮使節応接のため対馬に赴いた際
に、九州で従者が写生した豚の図（耳が大きく額に皺紋）。

九四 象猪

寛政六年（一七九四）春、江戸の葺屋町の小芝居で「南京渡
り象猪」として見せ物になっていた獣の図（全身はゾウのよ
うで、鼻と四足はバクに似ているとある）。

九五 鯨品【一部彩色】

「瀬見鯨」「座当鯨」「児鯨」「まつこ鯨」「のそ鯨」「なかつ鯨」「鯉鯨」「つち鯨」「さかまた」――九種のクジラの図。

【五集之五】

九六 猿楽故事

寛正五年（一四六四）四月に京糺河原で興行された勧進能の舞台および棧敷の図。

九七 三濱先生伝【彩色】

宝暦五年（一七五五）、烏仙堂散人著。三濱先生（鵜飼渭水）とその妾の肖像。

【五集之六】

九八 埋木の記

『埋木の記』は、隅田川の橋についての考証。「埋木」は昔の橋の橋柱のことで、その位置等を示した図が添えられている。源（屋代）弘賢著。文化十一年（一八一四）成立。

九九 藤橋之記

飛騨国にある藤橋（藤づるを編んで造った橋）の記。宝暦一四年（一七六四）、滄洲（蒲公英の主。飛騨高山の人）著。藤橋の図。

一〇〇 飛騨国白河籠之渡

藤蔓をロープのように川向こうに掛け、籠に人を乗せて渡す

「籠渡し」の図。飛騨の山中に生える「笹之魚」の図。熊笹に魚の形をした物が生え、のちに生きた魚になるという。藤橋、籠渡し、笹之魚の三図は、安永四年（一七七五）に瓢馬の俳名を持つ人物が、美濃国郡上（八幡）藩士中村某から提供された。

一〇一 大和話

『大和話』は大和国の地誌で押山安富著。「大和国総図」「所々行程略図」。春日社前の「養老年中の古碑」の図。「吉備大臣の母人」の墓誌の図。後醍醐帝「御太刀図」、同「御旗図」。

【五集之七】

一〇二 奥州宮古浦古鐘

陸奥国南部宮古浦（現在の岩手県宮古市）の漁師の網にかかり、盛岡藩主に献納された古鐘の図。

一〇三 銅屏図

染井の藤堂和泉守の別荘にある銅屏の図。「右銅屏一座、藤堂和泉侯染井の別荘にあり、姥茶屋といふ偶人の老姥の像を置る茶屋の前の芝地の前に置く、其先侯高虎、文禄の役に朝鮮国より俘来するものと云」

【五集之八】

『五集之九』

一〇四 老婆の像【刊】

文政一三年（一八三〇）に一〇五歳になった本郷御弓町の鰻屋岩次郎の母（祖母とも）の手形。翌年（一〇六歳）描かれたその肖像。（いずれも目出度い刷り物として市中に流布したもの）

一〇五 質素の枕

漢学者の太宰純（春台 一六八〇—一七四七）が手ずから作り、平沢元愷（旭山 一七三三—一九一）に与えた枕の図。枕には「五月十五日天地為交、此日男女交接俱祟、若在子時犯之、半年双亡、見保身要訣」と刻まれていたという。

一〇六 踏絵

キリシタン改めの踏絵の図（四種）。豊前国中津で隔年に行われる宗門改めの際に長崎から拝借したもの。担当者の菅沼定主が写した図を文化元年（一八〇四）に中邑病民が転写したもの。

一〇七 土中魚

文化一〇年（一八一三）五月一九日、画工の板屋慶意が、一〇年前に松平隠岐守の世子から贈られた鉢植から梅を引き抜き他の草花を植えようとしたところ、鉢の中から土塊が現れ、やがて生きた鯉に変じた。土の中から出現した「土中魚」の図。

一〇八 異竹

文化七年（一八一〇）五月、武州足立郡舎人町（現在の東京都足立区舎人）の百姓嘉七の藪に生えた異様な筍と、その土中から出てきた石の蛇の図。

一〇九 諸国入墨

江戸・大坂・京・長崎・駿府ほか各地の入墨の図（人足寄場を逃亡した者、駆落ちして捕えられた非人に施された入墨など、各種入墨の図）。

一一〇 願人持札

願人（願人坊主＝門付や大道芸を生業とする僧形の下級宗教者）が鞍馬寺から受け取る札の図。

一一一 諸商人持札并羽織合印

米春（玄米を漂白する搗米屋）、日雇座（日雇いを管理する組織）の札と羽織の合印の図。

一二二 歌舞妓者持札并非人持札

中村座・大薩摩座・結城座・桐座・森田座・市村座・河原崎座・都座および「古鉄買所」の札の図。車善七と品川松右衛門（松右衛門は江戸南部の非人頭）の札の図。
（諸国入墨 以下の図は、寛政六年（一七九四）に松右衛門から差し出された書上のうちにあり）

「五集之十」

一一三 那須国造碑【刊】

下野国那須郡湯津上（現在の栃木県大田原市のうち）で発見された「那須国造碑」の図。多賀城碑（宮城県）、多胡碑（群馬県）と共に日本三古碑の一つ。徳川光圀の命で、元禄五年（二六九二）に碑堂（現在の笠石神社）が建造された。図は、宝暦五年（二七五五）に大金貞正が刊行した『那須国造碑』に所載。

一一四 納那須国造塋中鏡図

徳川光圀は、「那須国造碑」近辺の古墳を発掘したが、国造の墓誌を発見できず、出土品を計測模写したのち、これを元の所に埋めなおした。出土した遺物のうち鏡の図。

一一五 殿上村産宮神鏡之図・附殿居椀図

甲州都留郡殿上村（現在に山梨県大月市のうち）の産土神に祭られていた「殿上郷大松之大明神 敬白 応永十九年（一四一二）九月八日 旦那行永」の銘が刻まれた掛鏡の図。居椀の図（殿居は殿上の古名）。

一一六 玉箒（たまはきはき）図

「此玉箒といふ草は、このはつせの奥の山の間の岩並たてる所になんの生ひ出侍る」

一一七 細男（せいのう）図

細男は、宇佐八幡などの祭礼の際に行列の先駆をする人形。

一二八 祓麻袋（ぬさぶくろ）図

祓麻袋は、神に奉納する麻を入れる袋。

一二九 出雲国佐陀宮龍蛇図

出雲国佐陀（佐太）神社に、毎年一〇月海中からやって来る龍蛇の図（二点）。

一二〇 大和春日社酒瓶図

大和国春日山で掘り出されたもの。

一二一 武州比企郡中尾村所獲銅器図

中尾村（現在の埼玉県滑川町）権現谷で掘り出された銅器の図。

一二二 楠公古鈴図

「是駄鈴之類ニシテ唐銅ニテ鳴声異也、紅葉山神主何某ノ蔵也」

一二三 石玉図

文化一〇年（二八一三）十一月、武州榛沢郡下新我村の百姓が畑の中の狐の穴から発見したもの。永禄七年（二五六四）に奉納。「勝善院殿前武州太守竹岸道節大居士」の法名が記されている。

一二四 土金伝（二宮随波斉鳴弦ノ事）

「甲弓山鬼明王」の札（産屋に注連縄を張り一間に一枚ずつ張る呪い札）の図。

〔六集之一〕

〔六集之二〕

一二五 岡山御台所記

岡山は河内国讃良郡の地名（現在の大阪府四条畷市のうち）。大坂夏陣の際この地の高橋孫兵衛宅が家康・秀忠の陣所となり、設けられた「御膳所」の間取り図。

一二六 十種神宝図式【彩色】

十種神宝（十種瑞宝）（瀛都鏡・辺都鏡・八握剣・生玉・死反玉・足玉・道反玉・蛇比礼・蜂比礼・品物比礼）の図。

〔六集之三〕

一二七 迦葉尊者木鉢

崎陽（長崎）の高林寺にある迦葉尊者（釈迦の一〇大弟子の一人）の木鉢の図。

一二八 異国渡海朱符（異国へ通商の御朱印写）

長崎の荒木家に伝わる、元和八年（一六二二）に荒木宗太郎が頂戴した交趾（ベトナム）渡海船の「御朱印」の図。御朱印船の旗の図。

一二九 朝鮮騎技【彩色】

正徳元年（一七一二）十一月四日、朝鮮通信使一行のうち馬術に長けた者が江戸城の馬場で馬の曲乗りを演じる様子を描いた図。

〔六集之四〕

一三〇 檜垣女自作像

檜垣女（檜垣姫）は平安時代の伝説的女流歌人。『檜垣女事蹟考』に、天明四年（一七八四）に、熊本の士敷士勇から来た手紙に記された「檜垣女自作像」の図が添えられている（同図は熊本西郊の洞窟内で発見）。

一三一 （吉野山桜木坊蔵）天之半鐸（の図）

一三二 水豹

寛政五年（一七九三）二月二日、筑前国響灘（現在の福岡県北端）鐘ヶ崎で生け捕りにされた「海獣」の図。

一三三 エーセルス

寛政五年（一七九三）に長崎から来た雌雄のエーセルス（ロバ）の図。

一三四 ヨーランウータン

寛政四年（一七九二）七月、紅毛船（オランダ船）が乗せてきたボルネオ産のヨランウータンの図。

一三五 陸奥ふり【彩色】

「陸奥ふり」は北斎の門人の北馬（蹄齋 一七七一一一八四四）が描いた東北地方の風俗スケッチ。早乙女、心太売り、氷売り、遊女などのほか、歌舞伎を禁じられているため腰に役者の面をつけ、人形芝居の名目で演じる田舎芝居の様子も描かれている。

（一三五 陸奥ふり）



【六集之六】

一三七 薬玉（くすだま）異図【彩色】

「続命縷図」「花扇之図」「花扇使之図」「茱萸囊之図」「同異図」「訶黎勒図」「同異図」「霊綵之図」

一三八 魯西亜鳥銃図説

「大村次五郎申立候ヲロシヤ船鉄砲図并仕懸訳書」のうち、「二重台ノ図」（ロシア船上の砲台の図）

【六集之七】

【六集之八】

【六集之九】

一三九 漢斗

「官斗」「官升」（中国明代に政府が用いた枡）の図。

一四〇 嶋立沢略記（相中大磯嶋立沢元由略記）

西行の歌で知られる「嶋立つ沢」の図（現在の神奈川県大磯町のうち）。

一四一 幸神像

上野国三国街道の高崎から伊香保・榛名にかけて、辻々に見られる道祖神の図（二点）。

一四二 古金掘起一件

麹町隼町の浪人（眼科医）中村至樂は、松前隼人の知行地下

【六集之五】

一三六 漂流人口状【二部朱】

宝暦元年（一八五一）一二月、奥州の漂流民又五郎ほかが清国の寧波から送還された際に、中国船から、厦門、寧波両官府の「日本国王」あて「咨文」（公文書）が渡された。その咨文の上書の図。「信牌」の図。

野国河内郡元吉田村百姓孫右衛門の屋敷地内に結城晴朝の埋蔵金があるとして、天明元年（一七八一）に発掘を願ひ出た。孫右衛門居屋敷の図。

一四三 地黄坊事蹟

谷中の妙林寺にある地黄坊の墓と位牌の図。地黄坊は、仮名草子作者で医者の方木（伊原城・伊丹木とも）春朔で、俗に地黄坊樽次。寛文十一年（一六七二）没。酒豪として知られ、慶安元年（一六四八）の池上太郎右衛門（大蛇丸底深）との酒戦について記した『水鳥記』の著者でもある。

〔六集之十〕

一四四 肥州島原焼崩【彩色】

寛政四年（一七九二）の雲仙普賢岳の噴火と眉山の崩落（島原大変）の図。

〔七集之一〕

一四五 修学院御幸御製并衆詠

御山荘（修学院離宮）の図

〔七集之二〕

一四六 飛州雷鳥記

乗鞍嶽図

〔七集之三〕

〔七集之四〕

一四七 弘安十年（一二八七）釈奠供物図録【彩色】

釈奠は孔子とその門人をまつる儀式。弘安年間に紀宗長が作成した「釈奠供物一巻」を天和三年（一六八三）に復元したもの。

一四八 林氏対州渡海普明丸図【彩色】

文化八年（二八一二）、將軍襲職（家斉の將軍就任）の祝賀のため朝鮮使節が対馬に訪れた際、応接役として同地に赴いた林述斎一行を乗せた船（普明丸）の図。

一四九 韓使饗饌図【彩色】

文化八年（二八一二）、朝鮮使節来訪の折に宴席で出された料理の図。

〔七集之五〕

〔七集之六〕

一五〇 鴛鴦鵲圖説

「田安府公」が「鴛鴦」「鵲」の違いを来航中の中国商人に描かせたもの。

〔七集之七〕

〔七集之八〕

〔七集之九〕

一五一 石州銀山旧伝御物【彩色】

石見銀山の「銀山附（役人）」や「銀山師」が家康から拝領した羽織、扇の図。

一五二 田楽法師由来・附考

田楽法師が用いる道具の一つである「高足」の図。

一五三（あやい〈綾蘭〉笠の図）

あやい笠は田楽法師が用いる笠。

一五四（田楽法師の道具）

高足図・刀玉図・理居（あやい）笠図・頻坐左羅（びんざさら）図。

一五五（職人歌合田楽法師の図）

一五六 壺碑考

「東奥州宮城郡市川邑多賀城壺碑全図」——現在の宮城県多賀城市に存在した多賀城が天平六年（七六二）に修造された際に作られた碑の図。日本三古碑の一つ。

〔七集之十〕

一五七 聖徳太子冠

聖徳太子の冠の図

一五八 本多忠勝鍔

本多平八郎忠勝（二五四八―一六一〇）の野太刀の鍔の図。
「北条氏直之土磯野太郎左衛門広之所持 田嶋六左衛門広長伝之」

〔八集之二〕

一五九 和歌会式

会席之図（人丸の祭壇、講師、文台、出席者の座席の位置など）

〔八集之三〕

一六〇 惺窩公小照

藤原惺窩（二五六―一六一九）の肖像。

一六一 徠翁肖像并略譜

荻生徠徠（二六六―一七二八）の肖像。

一六二 銅像二軀

小石川見附内にある幕臣加藤伝兵衛の地面から掘り出された古仏像の図。水道橋内稻荷小路の幕臣三木勘解由の地面から掘り出された玄徳の古銅像の図。（いずれも医者で博物学者の栗本丹洲へ瑞見 一七五九―一八三四）が文政七年（一八二四）に実物を見て描いたもの）

一六三 仏法僧鳥

木村兼葭堂（一七三六―一八〇二）が写した仏法僧の図。

〔八集之三〕

〔八集之四〕

〔八集之五〕

一六四 安間氏家藏御器図

神祖（家康）から下賜された、椀・飯櫃・膳・盃・盥・弁当
入れ・櫛箱・馬面・轡・刀・槍ほかの図。

一六五 和州八瀧村銅器図

天保二年（一八三二）九月二九日、大和国宇陀郡八瀧村（現在
の奈良県榛原町）で掘り出された銅器類の図。

〔八集之六〕

一六六 武蔵府中駅古碑

享和元年（一八〇一）、府中宿称名寺の境内で掘り出された
古碑の図。二つの碑のうち、一つに松平親氏（徳阿弥、俊山
徳翁芳樹院）の名が刻まれていた。

一六七 英一蝶紫語絵記・附伝

絵師の英一蝶（一六五二―一七二四）は、元禄十二年（一六
九九）に伊豆三宅島に流刑となり、宝永六年（一七〇九）に
赦免となった。「島の図」には、流刑地の三宅島や神津島、
式根島、新島、大島ほかの配置が図示されている。

〔九集之二〕

〔九集之三〕

一六八 韓簡訳解并約条問答

明和七年（一七七〇）五月、駿河国興津浦に漂着した朝鮮船
（乗組員は金取成ほか一三人）の図。米を入れる「上俵」「力
マス」（かます俵）の図。

一六九 僧徳本像并伝

徳本上人（一七五八―一八一八 浄土宗の僧）の肖像。

〔九集之三〕

一七〇 彗星図【一部朱】

文政十三年（一八三〇）の冬に観察された彗星の図。天文方
出役の者から入手したもの。

一七一 水車樋并水打柄杓図

文政六年（一八二三）五月、芝如来寺門前の佐兵衛が町奉行
所に独占販売を出願した消火道具の図。「水車樋」は省力ボ
ンプで、「水打柄杓」は柄を逆向きに付けて広い範囲に水が
撒けるよう工夫したもの。出願は五ヶ月後に許可され、販売
価格は「水車樋」が標準サイズで金三両二分、「水打柄杓」
は銀一匁五分だったという。

〔八集之七〕
〔八集之八〕
〔八集之九〕
〔八集之十〕

一七二 ちよろたゝき【彩色】
一七三 源左衛門舞容【彩色】

「女かと思れハ男なりけり」と歌われた名女形右近源左衛門の舞い姿。

一七四 肥田鼠（千年ムクラ）【彩色】

安永七年（一七七八）二月二日、本江（本郷）大根畑の質屋の穴蔵から出た肥田鼠の図。毛の色は鼬に似て、鼻の形はムグラ（モグラ）のごとし。

〔九集之四〕

一七五 細井広沢和歌

書家で漢学者としても知られる細井広沢（一六五八―一七三五）名は知慎の歌集。広沢が「今」という女性に書き送った歌で、大田南畝が安永二年（一七七三）に飯田町の葉屋小松屋の翁から借りて写したものだという。壬寅（享保七年（一七二二））の日記より、羽子板と羽根の図。上総国山辺郡田中村（現在の千葉県東金市のうち）の法光寺にある木像の図。

一七六 詠象歌并図【彩色】

文化一〇年（一八一三）七月に西洋人がもたらしたセイロン産の牝象（五歳）の図。屋代弘賢画か。

〔九集之五〕

一七七 寛永三輔像【彩色】

三代將軍徳川家光の輔導役を務めた酒井雅楽頭忠世・土井大

炊頭利勝・青山伯耆守忠俊の肖像。

一七八 加藤清正像【彩色】

熊本藩所蔵の像幅を借りて写したものの。

一七九 御麿并考【一部朱】

家康が用いた麿（采）・再拝（采配）の図。

〔九集之六〕

一八〇 勝田献日光紀行

『日光紀行』は、幕府の儒官勝田半斎（名は献。一七八〇―一八三二）の著。九月二日から同二〇日までの日光旅行（個人旅行）の記。「稲荷川」「霧降瀑」「上人橋」「華厳瀑」「中禅寺湖」「見裏瀑」（裏見の滝）の図。

〔九集之七〕

〔九集之八〕

一八一 宝永戊子京都火記

宝永五年（一七〇八）三月八日に outbreak した京都大火の火元等を記した略地図。

一八二 志州鳥羽騷擾（百姓一揆）

天保元年（一八三〇）から翌年にかけての「波切騷動」の記録（津藩の儒者で江戸藩邸詰めの斎藤拙堂のもとに届いた手紙の内容）。地理略図あり。

〔九集之九〕

一八三 (天地丸) 御船図【彩色】

天地丸は、三代将軍家光の御座船として寛永七年（一六三〇）に建造。文久二年（一八六二）廃船。他に犀口丸・飛鳥丸・浅草丸・橘丸・鵜飼丸・永寿丸・住吉丸・上総丸・武内丸・延宝丸・千代路御船・御雪船・御召大川御座・鯨御船・御駕籠船などの図。

〔九集之十〕

〔十集之一〕

〔十集之二〕

一八四 予州險山図【彩色】

周布郡板摺背奇観之図・新居郡胸突嶺之図・胸突嶺之図・口峯雨中下山之図・鍵懸嶺上躋之図・四手阪峯分間之図・石鉄山絶頂見分鎖拳之図・丸関分間之図・五社之峯分間之図・外山之内字石塔町見之図・岩嶽之図・山小屋之図（↓参考『予州石鉄山絶頂見分鎖拳図』請求番号一七六―四八）石槌山等の測量団を幕府が派遣したのは文政五年（一八二二）。

〔十集之三〕

一八五 加藤清正扇面書跡

万曆二十二年（文禄二年 一五九三）正月三日筆。正則あて。文面は「慶尚道之／軍師金碎討取令感悦候／猶帰朝之上／可為恩掌者也」

一八六 東海談抄

『東海談』は篠崎東海（維章 一六八七―一七四〇）の随筆。「昔の干菓子」の図。菓子は京の浜島内膳が代々製してきものの。菓子の名は「餠籠」「桂心」「渾沌」「加久縄」

一八七 野州館林領岩窟

松平右近将監領分野州都賀郡葛生町（現在の栃木県佐野市のうち）の浅間社がある山中で、巳年（天保四年（一八三三））大洞窟が発見され、その詳細が関東取締出役の手代から報告された。洞窟内外の略図。

〔十集之四〕

一八八 摂州霍満寺古鐘

摂津国西成郡長柄村（現在の大阪市のうち）雲松山霍（鶴満寺の鐘の図（この鐘は国の重要文化財に指定されている）。

一八九 天保甲午江戸火記・附大坂火記【一部朱】

天保五年（一八三四）七月一〇日出火の大坂大火の類焼地区略図。

〔十集之五〕

一九〇 天保壬辰（天保三年）琉使諸記（琉球座楽器図）【彩色】

鼓・小銅鑼・新心・哨呐・三金・三板・両班・金鑼・銅鑼・管・横笛・弓子・二線・三線・四線・長線・琵琶・胡琴

一九一 同右（琉球人器械図）【彩色】

刑鞭・金鼓旗・銅鑼・鐘木子・両班・喇叭・銅角・哨呐・鼓・撥子・虎旗・牌・涼傘・節・偃月刀・屋轎・鋒・傘・冠・簪・巾・笠・鳥

〔十集之六〕

一九二 青砥藤綱遺器（青砥左衛門大根税之図）

葛飾郡青戸村（現在の葛飾区青戸）の百姓の家に伝わる、竹と杉板で作った「山葵大根おろし」の図。

一九三（十番）虫合【彩色】

鈴虫（左）と松虫（右）を詠んだ歌合（判者は加藤千蔭と加茂季鷹。彩色図二〇点を含む）。

〔十集之七〕

一九四 尾藩騎射記

安永九年（一七八〇）八月一日、市ヶ谷の尾張藩邸の庭に馬場を設けて催された騎射の図、的の図。（幕府書院番小笠原平兵衛の門弟である旗本たちを招いて行われた）。

〔十集之八〕

〔十集之九〕

一九五 異獣二件

正徳四年（一七一四）、伊豆のある村で牧野家の家来の妻を殺した異獣の図。同年、山奥の洞窟に潜んでいるところを発

見され、殺害されたという。

〔十集之十〕

一九六 布留社古銅鈴

布留の社（現在の奈良県天理市布留の石上神宮）付近で掘り出された銅鈴の図。鈴は林某の所蔵となり、のちに小石川の本屋、雁金屋利兵衛の手に渡ったという。

― 続 編 ―

〔続初集之一〕 欠

〔続初集之二〕

一九七 疱瘡呪葉法【一部朱】

疱瘡（天然痘）の塗葉の製法と、塗る部位の図。文政六年（二八二三）松浦静山記。松浦静山は『甲子夜話』の著で知られる平戸藩老公。この葉は有徳廟（八代将軍徳川吉宗）の命で試され、大いに効果があったとか。静山もまた子どもたちを試している。

〔続初集之三〕

一九八 蕃薯解【彩色】

『蕃薯解』は蕃薯（琉球芋・薩摩芋）の栽培法や食べ方等を記した書。文化二年（一八〇五）成立。著者の小比賀時胤（生没年不詳）は和算家で本草家。「蕃薯種類之図」として、白芋・三ツ葉芋・胡蘿蔔（にんじん）芋・桜芋・薩摩芋・狐

芋の図あり。

〔続初集之四〕

一九九 武州一宮社記

『武州一宮社記』は行智著。文政六年（一八二三）成立。

「武州一宮」 氷川大明神（現在の埼玉県さいたま市に所在する氷川神社）の宝物（神馬・太刀・瓶子・埴瓶一口）の図。

二〇〇 奥州怪獣

奥州会津磐梯山の山中で「大筒」で撃ちとめられた怪獣の図。背丈は四尺八寸。姿はヒキガエルに似ていた。天明元年（一七八一）に大勢の子どもが失踪したのはこの怪獣の仕業だったという。

〔続初集之五〕

二〇一 大塩平八

大塩平八郎（二七九三―一八三七）の肖像、書、落款および「大塩平八郎の乱」の際に用いた旗の図。

二〇二 人生角

越中国下新川郡若栗村（現在の富山県黒部市のうち）百姓六右衛門の頭に角が七本生えた。天保五年（一八三四）、上州高崎の医者千本良昌哲の治療で七本共脱落したという。頭に角が生えている様子および抜け落ちた角が描かれている。

二〇三 支離長悦

野州都賀郡池森村（池ノ森 現在の栃木県鹿沼市のうち）の百姓初五郎甥茂十郎（のち盲人となり長悦と改名）は「陰莖格外に大きく」、人買ひ同様の男たちの手で見世物に出された。長悦の親類の者が、男たちを相手取り、天保六年（一八三五）六月、勘定奉行に訴え出た。長悦の裸体図。

〔続初集之六〕

〔続初集之七〕

二〇四 郁子輿籠図【彩色】

郁子はアケビ科の常緑低木「ムベ」。古く毎年一月一日に、近江国（現在の滋賀県）から、その果実が宮中に献上された（郁子の貢）。献上の郁子を入れた籠の図。

二〇五 白澤猿図

白澤は中国の想像上の神獣で、人語を話し有徳の王があると姿を現すという。

二〇六 俳諧前句付・附歌仙

俳諧の六歌仙（守武朝臣・宗鑑・長頭丸・勾当望一・八千代・梅翁）の像と句。

二〇七 松屋三種名器（松屋三名物）

南都（奈良）の富商松屋に伝わっていた茶の湯の名物三種（白鷺緑藻図・存星長盆図・松屋肩衝）の図。文化二年（一

八〇五) に松屋の当主の土門源三郎が写したもの。

伯家は平安後期から神祇官長官(「伯」)を世襲した白川伯王家。

二〇八 文政庚寅皇都地震

文政一三年(一八三〇)七月、京都を直下型の大地震が襲った。図は日々の震度を円の大きさで示したもの。

〔続初集之十〕

〔続二集之一〕

二二四 凹凸窩琴

石川丈山(漢詩人。詩仙堂と号した。凹凸窩もその号の一つ。一五八三―一六七二)が愛玩した七絃の琴の図。

二〇九 桜島神火【一部朱】

安永八年(一七七九)の桜島大噴火の様子を、薩摩と大隅それぞれ側から描いた起こし絵図。

〔続初集之八〕

二二〇 天狗骨

武州多摩郡萩窪村名主当麻五右衛門が所蔵する「天狗の骨」の図。

二二五 越中神楽踊筑子唄

越中五ヶ山(現在の富山県五箇山地方)に伝わる神楽踊り、筑子(こきりこ)唄で用いられる「筑子之竹」「鍬金」「蕩組」「かつら紐」の図。

二二六 蝦夷狹祭【彩色】

カラフトのクシユンコタン(日本人の商業・漁業の根拠地)で、安政四年(一八五七)七月に恒例の祭礼を見物した際の記。著者は源包尚。祭礼の図あり。「狹祭」は「挟祭」か。

二二一 胡障笏

蝦夷の漁民の笏(あしづえ)の図。

〔続初集之九〕

二二二 佃島観藤詞卷

文化四年(一八〇七)、古賀精里の題言・佃島観藤記・游佃島・佃島・永代寺・洲崎・遊佃島観藤逐過洲崎五首・游佃島風景図を添える。

〔続二集之二〕

二二七 美人百詠

鈴木道(松嵐居士)編の漢詩集。天保七年(一八三六)序。中国美人を描いた絵あり。

二二三 神祇伯家葬送古図

二二八 大黃製造聞書

二二五 大黃（タデ科の多年草）の根から漢方薬を製造する際に用いる炒竈の図。安政四年（一八五七）八月、福地苟庵謹識。

〔続二集之三〕

一二二〇 伏見院御臂当（ひじあて）の図

一二二一 架田図

「架田」は封田とも。中国の陸地の少ない水郷で用いられる田（『農政全書』に解説あり）。

〔続二集之四〕

一二三二 小笠原島の記

文久二年（一八六二）四月、軍艦「千秋丸」で父島に停泊中、柴田隼太郎が見聞を記した随筆。島に繁茂する「蝟樹」の図。

〔続二集之五〕

一二三三 徳阿弥君御碑

享和元年（一八〇一）十一月、武州多摩郡府中宿の称名寺で掘り出された徳阿弥（松平親氏 家康の遠祖）の古碑の図（八集之六にも）。

一二三四 楠氏銅鈴（古銅磬銅鈴記）

天保六年（一八三五）六月、旗本浅野梅堂が書庫で古い銅磬（楽器の一種）と銅鈴を発見した経緯を述べた文章。友野霞舟記。発見された「楠氏銅鈴」「開元古磬」の図あり。

二二五 簾太平棒

「簾」（ささら）は駿府で操り芝居の興行を認可される一方、囚人の取扱をしていた「河原もの」の一種。彼らが用いる太平棒の図。

二二六 東海のうきき（マンボウの図）【二部朱】

「うきき」はマンボウ（翻車魚、查魚）の別名。松浦静山『甲子夜話』の記事と「うきき」の図。

〔続二集之六〕

二二七 文政壬午異船紀聞【彩色】

文政五年（一八二二）四月、イギリスの捕鯨船が浦賀に来航したときの記録。イギリス船、旗、武器、食器、捕鯨道具等の図のほか船長や船夫下僕の姿を描いた絵が添えられている。

〔続二集之七〕

二二八 諸葛亮避邪鼓

中国（明）から帰化した河間家に伝わる諸葛孔明が用いたという鼓の図

二二九 村上義清軍配

戦国時代の信州の武將村上義清（？—一五七三）の軍配の図。

〔続二集之八〕

二三〇 こゝろの草紙【彩色】

『こゝろの草紙』は楽翁（松平定信）の随筆。享和二年（一八〇二）自序。挿絵多数。

一三二 中将姫和讃

中将姫（藤原豊成の女）は継母の讒言で大和国の日張山に捨てられたとされる伝説上の女性。和讃は高僧などの行跡を讃える仏教歌謡の一種で、日張山の青蓮寺が発行した中将姫の画像を収録。

〔続三集之九〕

〔続三集之十〕

一三三 武蔵国略図【刊】

〔続三集之一〕

一三三 異産

上州山田郡塩原村（現在の群馬県大間々町のうち）百姓某の娘「きた」（二〇歳）が、難産の末、内股が裂け、その傷口から女子を出産した。天保一二年（一八四一）閏正月の出産の場面を描いた図。

一三四 奈古屋神社古鏡

奈古屋神社は現在の静岡県伊豆の国市に所在。同社の後山で発見された古鏡の図。

一三五 観白龍記

宝暦十三年（一七六三）七月、肥前武雄（現・佐賀県武雄市）の山中で目撃された白龍の図。

〔続三集之二〕

一三六 江口為督真虎

江口為督（対馬藩士でのちに平戸侯に仕えた火術の専門家）が、朝鮮滞在中に釜山の草梁倭館で目撃した虎の図。倭館は日朝両国の外交と貿易推進を兼ねて設けられた施設（日本人居留地）。

一三七 品川鯨

寛政一〇年（一七九八）五月、品川沖に現れた鯨の図（同月三日に浜御庭で上覧あり）。

一三八 大鳥賊

上総国天羽郡金谷村（現在の千葉県富津市のうち）で捕獲された、長さ二間半（約四・六メートル）の大イカの図。

〔続三集之三〕

一三九 ミコラスコーピユンの図

顕微鏡の図。および顕微鏡で観察した米・胡麻ほか植物の種類と実、昆虫（アブラムシ・ノミ・ブヨ・シラミなど）の図。

一四〇 飼馬必用

『飼馬必用』は栗原信充（一七九四—一八七〇）著。安政二

年（一八五五）刊。馬体や馬具の図あり。

二四一 北野大茶湯制札

天正一五年（一五八七）一〇月に秀吉が催した北野の大茶会の開催を告示する制札の図。

二四二 松前氏略系図

「アバ」の図（アバと申八知レ不申候」とあり、用途不明と記しているが、魚網を浮かすための木片か）。

〔続三集之四〕

二四三 堀田正敦朝臣詠（職を辞せし時の長うたならひに反歌）

堀田正敦（一七五八―一八三二）は、近江国堅田藩主（のち下野国佐野藩主）。若年寄を務め、『寛政重修諸家譜』編纂を総裁した。天保三年（一八三二）に老衰のため引退。「畑に田に打出の鍬や小槌より」の句に添えて鍬の図あり。

二四四 嘉定私記

「嘉定」は、毎年六月一六日、江戸城大広間で譜代大名・旗本に將軍から菓子を贈る年中行事。『嘉定私記』の著者「竹裏亭」は、幕府の賄吟味役等を務めた小島安昌（一八三七年没）。文政元年（一八一八）七月序。小島は文化元年（一八〇四）頃から毎年「嘉定」のために「御菓子を点検」したという。友人で賄組頭を務めた堤朝風の協力も得て、この著をまとめたと記されている。当日の大広間の座席や大饅頭ほか

嘉定菓子の図などを収録。

〔続三集之五〕

二四五 晃山扈從私記（露の道芝）【一部朱】

天保一四年（一八四三）に举行された二代將軍徳川家慶の日光社参に従った成島司直（一七七八―一八六二）の歌（および漢詩）日記。成島司直は図書頭と称し、東岳ほかの号を持つ奥儒者で、將軍の侍講を務めると共に『御実紀』（徳川実紀）の編纂でも知られる。冒頭に簡略な挿絵あり。

二四六 上野出現柄杓

天保三年（一八三二）三月、上野御靈屋山門修復工事の際に、寒松院付近で掘り出された銅柄杓の頭の図。

二四七 蓄米経験・附有益曰

蓄米の法と「有益曰」の図。防虫に適した米袋と齒車仕掛けの米搗き機を絵入りで紹介。この「有益曰」で米を搗くと、従来の方法に比べ、江戸市中で年間三七万八千俵が損耗を免れるとする試算も示されている。

〔続三集之六〕

二四八 秦伝国璽【刊・朱】

秦始皇帝の国璽の模刻の図。模刻は天保二年（一八三一）に屋代弘賢が作成。出典は『古玉図譜』

二四九 山王桜猿録【刊】

『山王桜猿録』は三の字尽くしの狂文。嘉永四年（一八五二）年刊。愛田三重跋。挿絵に戯画あり。

二五〇 羽州怪魚

文政七年（一八二四）八月、羽州村山郡（現在の山形県のうち）が洪水に襲われた際に蔵主嶽から出てきた怪魚の図。

〔続三集之七〕

二五一 乾隆帝幸道図【一部朱】

乾隆帝の行幸に従う侍衛・総督・女騎の図。乾隆帝（一七一―一九九）は清朝第六代皇帝。この図は、千島方面の探検や書物奉行として知られる近藤守重（号は正斎。一七七―一八二九）が、漢客（長崎に来た中国人か）が持っていたのを、寛政八年（一七九六）に絵師に模写させ秘蔵したものだといふ。

二五二 ダゲウロテイベ解

写真（撮影）術の解説。カメラ、三脚等の図。

二五三 源為朝遠裔【刊】

豆州（伊豆）新島の青沼氏家蔵の図を天保六年（一八三五）に漢学者の安積良斎が模写したもの。

二五四 常州人骨

文政一〇年（一八二七）に常州久慈郡（現在の茨城県のうち）の弥勒寺で掘り出されたミイラの図。三五年前、寛政四年（一七九二）に同寺に葬られた遺体だったという。

二五五 罰釜之図

江戸町奉行所同心の今泉覺左衛門が奥州会津若松城下で模写した、釜茹での刑で用いる釜の図。石川五右衛門が同刑に処された際、当時の若松城主蒲生氏郷が鑄造して送った釜の「扣」（ひかえ＝予備）だという。

〔続三集之八〕

二五六 赤穂義士賜剣之図

元禄一六年（一七〇三）二月四日、大石良雄らが熊本藩（細川家）の下屋敷で切腹する場面を描いた図。右田才助が当日の記憶に基づいて描いた図の写し。文化一三年（一八一六）の飯岡義章による解説あり。

〔続三集之九〕

〔続三集之十〕

〔続四集之一〕

二五七 安中侯遊中禅寺記【刊】

『遊中禅寺記』は、上州安中藩主板倉勝明（一八〇九―一五七）の著で、嘉永四年（一八五二）刊。中禅寺・華嚴滝・中禅寺湖等を描いた図入り。

二五八 八陣図解

効率的な米搗き機の図。

二五九 稻花雌雄蘖之図解

〔続四集之三〕

大藏永常（二七六八—一八六〇）述。

二六四 明珍代々花押

二六〇 古鉄面

〔続四集之四〕

信州佐久郡八重原村（現在の長野県東御市のうち）で出土した「古鉄面」の図。鉄面は鼻の長さが二寸五分ほどで、顔面には多数の鉄鉾が打たれていたという。享保年間（二七一六—三六）に村上某が所蔵していたもの。

「明珍」は甲冑師の家の名。刀の鐔の製作でも知られ、江戸時代を通して多くの門人を集め栄えた。初代から二七代まで代々の花押の図は、享和三年（一八〇三）に作成されたもの。「御尋二付書上候明珍家代々花押写」。

〔続四集之二〕

二六一 若むらさき・附了然尼【刊・彩色】

〔続四集之五〕

『若むらさき』は、黄檗宗の僧侶了然尼（二六四六—一七一）編の歌集。元禄四年（二六九二）刊。挿絵あり。

二六五 持明院家郢曲譜

二六二 和田酒宴の盃

〔続四集之六〕

「和田酒宴」は和田義盛と曾我十郎、遊女虎が登場するいわゆる曾我物の一場面。その際用いられた盃の模造品を楽翁（松平定信）から示された松浦静山は和田酒宴に関する記事と共に、盃の図を『甲子夜話』に書きとめた。『甲子夜話』から抄出した記事と図。

〔続四集之八〕
〔続四集之九〕
二六六 刀剣問答

二六三 妙法国益白

『刀剣問答』は、宝暦二二年（二七六二）、伊勢貞丈著。「あふひ（葵）鰐」の図あり。

文政二二年（二八二九）秋に江戸の淀橋辺で使われ始めた、

二六七 刀剣図【彩色】

『刀剣図』は、宝暦一三年（一七六三）に伊勢貞丈が『刀剣問答』の詳らかでない部分を図で補ったもの。「蒔絵螺鈿野太刀」「糸巻太刀」「鞘袋力ケタル糸巻太刀」「白太刀」「黒太刀」「兵庫鎖太刀」「怒物作太刀」「打刀」「鞘巻」「脇指」の図。

二六八 成島司直職人歌合【彩色】

成島司直（○晃山扈從私記の項に既出）の著か。十番歌合。「芋壳」「茄子壳」「魚うり」「豆腐屋」「米屋」「薪屋」「歯磨壳」「くすし（葉師）」「女郎買」「老嫗」「石や」「たかや（簗屋）」「三線師匠」「大屋」「手習童」「水汲女」「いかたし（筏師）」「渡もり（守）」「発智法師」「かまはらひ（竈祓）」の図。

二六九 三州広忠寺御由緒（三州桑ヶ谷広忠寺御由緒巨細書）

広忠寺は徳川家康が父広忠の菩提を弔うために桑谷（現在の愛知県岡崎市のうち）に創建した寺。広忠位牌及びその裏書の略図。正徳元年（一七一二）に来日した朝鮮通信使の一人「金時海峰」の書（「広忠寺」の三字）の掛け軸の図。

二七〇 富士講起原由来

富士講は江戸時代に流行した民間宗教の一つ。元祖「書行」の肖像。

〔続四集之十〕

二七一 嘉永乙酉（己酉の誤り）御狩の記【刊】【彩色】

嘉永二年（一八四九）三月一八日に下総国小金原で催された御狩（将軍の狩猟）の記録。松戸宿「船橋」の図【刊】。中野牧の狩場の図（現在の千葉県松戸市のうち）【彩色】。

〔続五集之一〕

二七二 広東記并図【彩色】

「広東湊真景」（中国の広東港の図）。原図は文化一四年（一八一七）に唐船（中国船）で帰国した薩摩の漂着民がもたらしたものだという。

〔続五集之二〕

二七三 大高源吾手簡・附煙管図

赤穂浪士の一人大高源五が、元禄一五年（一七〇二）九月、吉良邸討入りの三ヶ月余り前に母親に宛てて書いた手紙と愛用の煙管の図。

〔続五集之三〕

二七四 文政壬午白赤気

文政五年（一八二二）九月に天空に出現した白気（白い気体）と赤気（赤色の雲気）の図。

〔続五集之四〕

〔続五集之五〕

〔続五集之六〕

二七五 天保中唐尹闘争風声

アヘン戦争に関する唐船風説書（中国船がもたらした情報）。
関係略地図あり。

二七六 江戸古図二葉【彩色】

・長禄年中（二四五七―六〇） 江戸絵図
・永禄年中（二五五八―七〇） 相州小田原北条氏康時代武州
江戸絵図

〔続五集之七〕

二七七 参河国鄉村沿革図考【彩色】

文化一三年（二八一六） 信好稿・成身縮図。 神代から文化一
三年当時まで、三河国の街道村々沿革図。

二七八 日光道中略図

〔続五集之八〕

〔続五集之九〕

二七九 牧野成著高雄紀行【彩色】

文政六年（一八二三） 九月九日、当時大番頭だった旗本牧野
伊予守成著が、紅葉の名所である高雄（現在の京都市右京区
のうち）に出かけた際の紀行。 著者は成著。 佐々木一陽書。
伊勢貞醒による挿絵（風景図）あり。

二八〇 栗軒雜記

栗軒は宮崎成身の号。 用箋の柱に「文化己巳」（文化六年＝
一八〇九）「白水家藏」とあり。 巻下に「雲和」の図。 雲和
は琴の称。

二八一 御秘事簡略図【彩色】

「大山」「中山」「小山」「虎ノ子」等と命名された大筒や
「鎧盾」「水牛革盾」等の図。 この図は「紅葉山御蔵」（江戸
城内紅葉山の倉庫）に所蔵されていて、容易に閲覧できない
旨付記されている。

〔続五集之十〕

二八二 後水尾帝御製年中行事

後水尾天皇（二五九六―一六八〇）筆。『後水尾院當時年中
行事』とも。『視聽草』所収のものは、近衛基熙（二六四八―
一七三二）による天和元年（二六八二）の写本。「みな月の
輪」（水無月祓の輪）「虫籠」の図あり。 水無月祓の輪は、茅
（あるいは藁）で作り、これをくぐり抜けると災禍や病を免
れるとされた。

〔続六集之二〕

二八三 脈説

漢方（中国医学）の脈に関する説。 宮崎事幹（先生）口授。
宮崎成之（受業）筆受。「二寸」「寸」「関」「尺」等の図示。

二八四 金田樂志軒確【刊】

樂志軒金田良宅が考案した米搗き臼の広告文。図あり。天保七年（一八三六）刊。

〔続六集之二〕

二八五 異域書載豊公証（ならびに真像）【彩色】

『鴻苞集』所収「豊関白像」（豊臣秀吉像）

二八六 異国渡海

豪商末吉長方が寛永九年（一六三二）に京都清水寺本堂に奉納した扁額型の絵馬の図（渡海船と乗員の風俗）。友人の「後藤子」が写した図を転写したものである。絵馬の実物は現在国の重要文化財に指定されている。

二八七 鎮西公肖像【刊】

藤原義宣模写の鎮西公（源為朝）の肖像。

二八八 俊寛僧都碑銘【刊】

俊寛僧都の墓と墓碑および有王松の図。俊寛僧都の像。

二八九 爵蛇変身考【彩色】

松浦静山著。爵（雀）が蛤と化し、蛇が蛸に化すという説の考察。静山の領内（静山は肥前平戸藩の前藩主）の人が目撃したという蛤の図（中に雛鳥のようなものが）。

〔続六集之三〕

二九〇 頼朝卿日記抄

「鎌倉八幡宮」所蔵、源頼朝の自筆日記の模写図。天保七年（一八三六）の文武耕堂主人筒井忠英（一七六二—一八三八）の記あり。忠英は御書院番などを務めた幕臣。

二九一 鎌倉古図

「大町関氏蔵」の付記あり。

二九二 谷文晁画法

寛政三年（一七九二）に谷文晁（一七六三—一八四〇）が描いたものを、文化六年（一八〇九）に「終南」なる人物が模写。樹木・岩・人物・建物・橋・舟等の描き方を示した図。

〔続六集之四〕

二九三 関ヶ原御陣廓図【一部朱】

図中に「濃州御勝山安楽寺 御陣廓大概絵図」とあり。安楽寺（現在の岐阜県大垣市赤坂町に所在）は、関ヶ原合戦後、東軍の本陣が置かれた「岡山」（勝山）に建てられた寺。

二九四 根津権現祭礼図【刊】

図中に「江戸根津大権現神前額面之縮図」とあり。正徳四年（二七二四）九月二一日の祭礼を描いた額（拝殿に掛かっているもの）の縮図。天保十一年（一八四〇）刊。版元は馬喰町二丁目の森屋治兵衛。

二九五 劇漢如臯古画賛

歌舞伎狂言作者の二代目瀬川如臯（一七五七—一八三三）が著した風俗考証の書で、『只今御笑草』の書名で知られる。文化九年（一八一二）著。記憶に残る大道芸人や物乞いの姿を描きその芸を記したもので、如臯が生れる前の例も補足している。『視聽草』所収の資料は大田南畝の蔵書の写しで、南畝の書き込みと文政五年（一八二二）四月三日の奥書あり。

〔続六集之五〕

〔続六集之六〕

〔続六集之七〕

〔続六集之八〕

二九六 浦賀礮台【一部朱】

- ・「嘉永六丑年八月浦賀新規御台場出来二付積書」（嘉永六年へ一八五三）に浦賀に新設された台場Ⅱ砲台の坪数や形等を記した書付）に見える、台場の略図。
- ・「御台場地図」（一二箇所の手場の配置、それぞれの距離等を示した図）

二九七 箭除符【刊】

- ・鉄砲の弾ほか災厄除けの札の図。札に書かれた四つの呪字は、紀州和歌山藩主徳川光定（光貞）が鉄砲の弾が当たっても無傷だった雉の風切羽の裏に記されていた字だという。また、この字を記した呪符を携帯していた家治（一〇代将軍）の小姓新見愛之助が落馬して牛ヶ淵に転落したにもか

かわらず傷を負わなかった話も紹介されている。

- ・文政一三年（一八三〇）頃、田安家が発行した厄除け札の図。

二九八 御磨【彩色】

山角氏蔵東照宮（徳川家康）御磨の図。寛政四年（一七九二）に近藤守重（通称重蔵、号正斎）が模写した図を、文政二年（一八一九）に栗軒（宮崎成身）が写したもの。

〔続六集之九〕

二九九 御遊獵処考拠

慶長一〇年（一六〇五）から元文四年（一七三九）までの將軍の狩獵（御鹿狩）の概略記録。

- ・平柳（現在の東京都足立区と埼玉県川口市の一部）の御狩場の図。

- ・駒場野（現在の目黒区駒場周辺）御狩場の図。

三〇〇 印図之次第

仏教（密教）において手指で示す各種「印」の図（浄三業・仏部三昧耶・蓮華部三昧耶ほか）。

〔続六集之十〕

三〇一 御由緒器物調度図【彩色】

東照宮（家康）の遺品の図。
 ・東照宮恩賜御鑒（Ⅱ兎）図（大岡亀之丞忠卿所蔵）

- ・東照宮恩賜御胴丸図（根来出雲守所蔵）
- ・東照宮恩賜御太刀図（大岡亀之丞忠卿所蔵）
- ・親忠君恩賜御短刀図（小林勝之助正暁所蔵）
- ・東照宮御鐔図（下総国葛飾郡船橋常盤社神宝）
- ・清康君恩賜御槍図（小林勝之助正暁所蔵）
- ・同 御盃図（同所蔵）
- ・東照宮恩賜御筆指物図（松平安房守忠敷所蔵）

（三〇一 御由緒器物調度図）



- ・東照宮恩賜御幕二種（伝・九鬼長門守守隆へ下賜）
- ・東照宮御給（近江国坂田郡国友鍛冶所蔵二種）

- ・東照宮御肌着（武蔵国橘樹郡大師河原村農家幸之助所蔵二種）

- ・同 御盃（同所蔵）
- ・東照宮御膳具類図（遠江国郷土安間某蔵）
- ・同 御武器数種（同蔵）
- ・同 勝軍地蔵厨子（同蔵）
- ・同 御盃（武州葛飾郡農家蔵）
- ・同 御杖金具（同蔵）
- ・同 御草履（同蔵）

三〇二 神代伊呂波

漢字渡来前にわが国で使われていたとされるいわゆる神代文字の図。

〔続七集之一〕

三〇三 好事春初戯

文政七年（一八二四）の源（屋代）弘賢の考証隨筆に見える布銭（中国古代の青銅銭）の図。

三〇四 金子篆刻

幕臣で金子与一（号は蓑香。一八一五—九二）が製作した篆刻の印影ほか。蓑香は書院番与力で、昌平坂学問所の『実紀』（徳川実紀）編纂所に出役（出向）していた人。篆刻に長じ、維新後は天皇および皇后の印璽を刻した。

三〇五 寛延勸進能書留

寛延三年（一七五〇）に神田筋違橋外の空き地で興行された
観世太夫一代能の記録に添えられた図（舞台、棧敷、札幌、
番所等の配置図）。

三〇六 弓隊（調練順書）

弓隊の調練法を順に図示したもの。成身の男の宮崎明によれ
ば、これは成身が持弓頭を務めていた頃（安政四年（一八五
七）から翌年にかけて、市川一学（一七七八—一八五八
上州高崎藩儒で兵学者）の指導で、糺町三番原で調練したと
きの図だという。

三〇七 大湾漂着

文化六年（一八〇九）に漂流して台湾に漂着した天徳丸の乗
組員（一四人）は、翌七年一二月に清国から長崎に送還され
た。その間の経緯を述べた漂流民の「口上」の中に、「剃刀」
の図、清国の「歡樂紙」（正月に吉祥と富を願って貼る切り
紙）、「双六」の図あり。

『続七集之二』

三〇八 御当家御印章【一部朱】

東照宮（徳川家康）から家慶まで歴代將軍等の印影、花押の
図（他に「御代々御直垂之図」も）。文化一四年（一八一七）
の成身の記によれば、これらの図は右筆組頭が作成した写し
を入手したものだという。

三〇九 武將花判【一部朱】

源義家ほか武將の花押の図および印影。収録されている武將
は、義家、義国、今川氏親、今川義元、織田信長、徳川家康、
武田信玄（晴信）、北条氏直、上杉景勝、武田道遠軒、武田
勝頼、豊臣秀吉、豊臣秀次、北条氏政、北条氏康、武田信虎、
真田昌幸、木曾義昌、伊達政宗ほか。

三一〇 承応以来賜米次第（御張紙直段）【刊】

張紙直段は幕府や藩が家臣に禄米を金銭で支給する際に用い
られた米の公定価格。文政九年（一八二六）改の一枚刷り
「御張紙直段」（酔月斎刊）には、承応元年（一六五二）から
文政九年（一八二六）までの張紙直段が一覧表になっている。

『続七集之三』

三一一 日光御庫二品【一部彩色】

日光御宮一ノ御倉所蔵の甲冑、日傘、山駕籠の図。日傘は関
が原の陣中で（家康が）用いたもの。山駕籠は石田三成謀反
の際に（家康）の逃亡用に使われたものという。

三一二 文雄雀宿戯歌【彩色】

三二三 柳營狂人

天保四年（一八三三）一二月二九日に柳營（江戸城）に紛れ
込み將軍と直接面会したいと申し出た三人の男が差し出した
「手札」と所持していた軸物、釣竿の図。三人は乱心した狂

信的な日蓮宗徒として処理された。

〔続七集之四〕

三二四 重新徽典館碑

徽典館は寛政年間（一七八九―一八〇二）に幕府が甲府に設置した学問所。甲府学問所とも。天保一四年（一八四三）に再建整備された際に、重新徽典館碑（友野瑛撰、浅野長祚書）が建てられた。その碑文と篆額（題字）の図。

三二五 馬齒見様

『要馬秘極集』より一歳から一〇歳までの馬の歯並の図。

三二六 大礮船打【一部朱】

嘉永七年（一八五四）八月に浜御庭前の海上で「大筒船打調練」（船上から大砲を発射する演習）が行われた際の図。

〔続七集之五〕

三二七 嵐山記行【彩色】

文政七年（一八二四）三月一六日、牧野伊予守成著が京都の花の名所嵐山を訪れた際の紀行。三輪久和書。伊勢貞醒画。

三二八 麻島流小鏡之巻【彩色】

『麻島流小鏡之巻』は麻島（馬島）流眼科書の一つ。同流は室町時代の僧医馬島清眼が開いた眼科の流派。眼病の種類を示した図譜を載せる。

三二九 夷歌

「大名の行列をよめる長歌」「四季の長歌」「しはらくの詠」（彦磨作）「儒者述懐」（蜀山人作）ほか狂歌。「四季の長歌」に春夏秋冬の文字で顔を描いた戯画あり。

〔続七集之六〕

三三〇 摂宮秘録

（大坂城）「桜御門」・「流芳楼」の額・「御数寄屋跡有之石灯籠」・「御数寄屋跡御手洗鉢」の図。

〔続七集之七〕

三三一 白気

天保一四年（一八四三）二月七日夜、（江戸から）西南の方向に「白気」が確認された。天文方の山路金之丞はこの「白気」を彗星の光芒であると推測している。駿河国の徳願寺山の峰付近に見られた「白気」の図。

三三二 富箇所附【刊】

御免御富（幕府に許可された富籤興行）の開催日、場所、賞金等の一覧。文政一二年（一八二九）刊。

〔続七集之八〕 欠

〔続七集之九〕

三三三 叡山（寛永寺）御宮図・増上寺御廟図【彩色】

〔続七集之十〕

三三四 朝鮮国誌（朝鮮国八道図・八道総図）【彩色】

宮崎成美（成身の父）編『朝鮮国誌』（文化一四年―一八一七）のうち。宮崎成美（一七七二―？）は幕臣で、号を畏齋、藁谷。引退後、江戸小石川に私塾学習館を開いた。

三三五 同右（東葉府使大庁召出され候節人数行列）略図【彩色】

〔続八集之二〕

三三六 万国旗章図譜【刊・色刷り】

『万国旗章図譜』は、清国から米利堅（アメリカ合衆国）まで、各国国旗や艦船の旗二九一種の彩色図譜。嘉永五年（一八五二）序。

〔続八集之三〕

三三七 吉良義英（史）墓

牛込の万昌院にある吉良上野介義央の墓の図（現在は中野区上高田四丁目の万昌院功運寺にある）。

三三八 信家鍔【一部朱】

信家は室町時代末期の甲冑師で（生没年不明）、鉄鍔の名工として知られる。その図（押形）。

〔続八集之三〕

三三九 大沼枕山詠物詩【刊】

『詠物詩』は漢詩人大沼枕山（一八一八―九二）の詩集。天保一一年（一八四〇）序刊。牡丹の図あり。

三三〇 六律六呂次序

六律は陽の声に属する六種の音。六呂は陰の声に属する六種の音。箏、横笛ほかの図。

三三一 転寝の遊目【刊・色刷り】

安政五年（一八五八）、江戸でコレラが大流行し多数の死者が出た。同年刊行の『転寝の遊目』（別名『安政箇旁痢流行記』。仮名垣魯文編）の挿絵には、火葬しきれない棺が山積みになった火葬場（茶毘室）の光景や風説中の妖怪変化が描かれている。

〔続八集之四〕

三三二 甲辰阿蘭船到来【彩色】

天保一五年（一八四四）七月、国書を携えたオランダ国王の特使が長崎に来航した。国書はわが国に開国を勧めるものだったが、幕府は勧告に従う意志のない旨を回答した。長崎に来航したオランダ船の図・長崎港内の様子・特使コープスの肖像。

三三三 水華録（桜田門外の変関係）

猿と熊と喰い合う図。水戸殿家来が国許を出る際に立てた柱の図（「至大至忠魂義膽楠忠臣招魂表」の一四字が記され

ている。

〔続八集之五〕

三三四 親族便覧・附運環図【刊】

「親族便覧」は享和元年（一八〇一）刊、文政八年（一八二五）再刻の親族一覽。「運環図」は、栗軒（宮崎成身）が作成した服忌令（服喪期間等の規則）の早見表。

三三五 和漢研譜抄

『和漢研譜』は絵師鳥羽台麓（一七三九—一八二三）の著作で、寛政七年（一七九五）序。壬生忠岑、小野道風、僧空海ほか名家の硯および中国の名硯の図。

三三六 薪枕

寅の七月頃市中で売られた磁器製の「薪枕」の図。鉄製のものも昔からあるが、磁器製は新商品だとか。

〔続八集之六〕

三三七 炮術俗弁

銃隊の西洋式訓練（号令等）の図解。嘉永七年（一八五四）八月著。

三三八 古瓦

親王屋敷、北条屋敷、政子御所、頼朝屋敷、梶原屋敷、太閤桃山御殿、奥州多賀城ほかの古瓦の拓本。

〔続八集之七〕

〔続八集之八〕

三三九 神祖百四十度御戦場図【彩色】

「三州苅谷表御初陣之図」から「大坂両度御出陣図」まで、徳川家康が出陣した戦場の図。一四〇種。

三四〇 茶七事

茶七事は茶事七式、七事式とも。茶道の七つの式作法（花月、一二三、廻炭、且座、廻花、茶かぶき、員茶）。茶室における亭主と客の座などを示した図あり。文化元年（一八〇四）八月、山内養春写。

三四一 山城才智（石油売弘所引札）【刊】

「筋違御門外広小路須田丁式丁目地角」の山城屋義右衛門の石油販売所の広告ビラ。精製した石油（くさうつ）のあぶらの値段は一升二四八文とある。